

## 続編の開始に当たって

小島正憲

## 経営の現場にこそ人間の本性は現れる

私は縫製加工業者として、無宗教の国・日本で20年、仏教の国タイで1年、儒教の国・韓国で1年半、共産主義の国・中国で4年と、それぞれに経営に携わってきました。今回のこの文章は、その中国編としての中間報告です。来年には、イスラム教の国・バングラデシュで新たに工場経営を始める予定です。またキリスト教の国・オーストラリアにも親しくつき合っている工場がありますので、そこで実践的に多くのことを教えていただいています。

人間の本性は、その人間が生命の危険にさらされた時や、金銭面のトラブルに巻き込まれた時などに、如実にあらわれてきます。留学や研修旅行程度では、その地の人間の本性を見抜くことは不可能です。企業経営という実践の場で、黒字になった場合の利益の分配、赤字になった場合の倒産・閉鎖・撤退などという事態の推移中でこそ、彼らの本性が赤裸々にあらわれてくるのです。私は宗教や思想の違う国で、企業経営を行う中で、人間の本性について、全世界に通用する普遍的原理を抽出したいと考えています。イデオロギーの終焉が云々される今こそ、拝金思想に毒されることなく、考察を深めたいと思っています。その意味で、今回のこの受賞は、私のこの試みを多くのみなさんに認知していただく手始めとして、絶好の機会だったと思います。できるだけ早く続編を書き上げますので、ご期待ください。

## 1. 私の基本的立ち位置

私は20年前(1994年)、サピオの懸賞論文(課題:「大世紀末の生き方ー日本そして日本人論」)に応募した。そして運良く大賞を射止めることができた。上記はそのときの「受賞の言葉」である。この立ち位置は、今でも全く変わっていない。ただし、この「受賞の言葉」では、「来年からバングラデシュで縫製工場を稼働させると予定である」と書いているが、これはその時点では実現できなかった。バングラデシュに行く前に、ミャンマーやヨルダン、中国の瓊春などに寄り道していたからである。そして2010年、やっとバングラデシュに辿り着き、現在、念願のイスラム教国で工場を稼働させている。ありがたいことに、ダッカの工場内にはヒンドゥー教徒が10%ほど働いており、私の研究対象にヒンドゥー教まで加わることとなった。私は工場内で異教徒と触れあいながら、連日、驚き・失望・感激の事件を体験し続けている。

私は今、異文化経営を堪能しながら、「人間の本性の探求」に肉迫している。

## 2. 「多国籍中小企業奮戦記」

私は、2000年に「多国籍中小企業奮戦記」と題する本を、伯楽舎から刊行した。主に、ミャンマー工場での悪戦苦闘と、当時、同時進行していた日本での中国人労働者との労働争議を、書いたものである。この本は、売れないとわかっていたので、最初から2000部しか刷らなかつた。したがって現在、一般書店では購入できず、中古書店でのみ可能である。

この本は、興奮冷めやらぬ時期に、怒りにまかせて書いていたため、今、読み返してみると、文章は稚拙であり、論旨が一貫していない。出来の悪い自分の子供を見ているようで、恥ずかしい限りである。しかしその体験は、「若気の至り」、「恐い物知らず」、「猪突猛進」などの表現がピッタリ当てはまるようなものであり、今ではとても再現できないだろう。あれから13年、中堅経営者と言われていた私も、今や老練やら円熟やらという修飾語の付く年齢になってしまったが、今なら、ミャンマーでも労働争議でも、高等戦術を駆使し、より少ない労力で成果をあげることができるだろう。

## 3. 院政厳禁

私は今から5年前に、会社経営から身を引いた。経営者の中には、引き続き会長などの役職に留まり、会社経営に隠然たる影響力を及ぼす人もいる。私はそれらが、後進の成長を阻み会社にマイナスの影響を与える実例をたくさん見てきた。したがってすべての役職に付かず、完全引退した。私は「院政をいっている」といわれないように気をつけ、できるだけ会社経営にはタッチしないようにしていた。ただし会社の株の大半は保持しているので、その後はオーナーという肩書きで行動することにした。それでもできるだけその名刺は使用せず、他の公職の名刺で動くようにしていた。

実際には、調査研究に東奔西走し、情報発信に命を賭けたため、会社経営に口を出すヒマもなかつた。

## 4. 高齢者としていかに生きるか

私は5年間、体力を過信し、危険に身をさらし走り続けてきた。しかし昨年11月、バングラデシュで緊急入院するハメとなり、実際に死を意識し、人並みに老齢を自覚することになった。その時点で私は、当初の私の立ち位置からは、随分、遠いところに来てしまったことに気が付いた。同時に、多くの方に約束した「人間の本性の探究」が中途半端で終わ

っていることに、心が咎められた。私はすでに66歳であり、私の友人の中では、すでに亡くなっているものもいる。「人間の本性の探究」のために、私に残された時間もあまり長くはない。異国の病院の天井を眺めながら、私は焦った。

日本に緊急搬送されてしばらく静養し、私は、「72歳までまだまるまる5年間が残されている」と、考え直すことにした。同時に今までの陣頭指揮型の仕事の仕方を変更することにした。今後は、思い切って仕事を他人に任せ、他人の体験を自分に取り込むことによって、最低3か国の工場現場で同時並行作業をしようと思っている。

私が72歳にこだわるのは、若い時期に心に誓った「十年一節」を最後まで守ろうという意識からである。73歳からは、次ぎのステージで戦いたい。72歳まではそれまでの準備である。もちろん「老人決死隊結成」や「1000兆円超の返済運動」など、老人にしかできない行動を視野に入れ、その仕掛けもしていく。

## 5. 何よりも今がおもしろい。書き残しておきたい。

私は今、バングラデシュやミャンマーで、工場経営に取り組んでいる。院政とそしられぬように、若手の成長の邪魔をしないように、最大限の配慮をしながら、趣味の「人間の本性の探究」に没頭している。私は今、人生の佳境に入っている。何よりも現在がおもしろい。この日々の驚き・失望・感激を、どうしても書き残しておきたい。これが、私が、「続・多国籍中小企業奮戦記」を書き始めようとした動機である。ただし今回は、今のところ単行本にする気はない。思いつくままに書き連ね、メールで読者に配信させていただく予定である。

残念ながら、読者のみなさんがもっとも知りたいと思われている大国の事象には、私は触れない。私がそこに触れることが、他人に迷惑をかける結果になるからである。それについては、その事象が時効になったとき、慎重にタイミングを見計らって書かかせてもらう。今は、私が書かないことが、読者の方への無言のメッセージだと解釈してもらいたい。

また私が行っていることは、資本主義社会におけるビジネス展開、つまり金儲けなので、そこには公開できないノウハウがたくさんある。これらはコロンブスの卵のようなもので、タネがばれれば誰にでも簡単に真似できる。したがって公開しない部分もある。これらは、やがて他の追随を許さなくなった段階で、発信するつもりである。このように書くと、多くの情報発信が賞味期限切れのものばかりになってしまい、おもしろくないような気もするが、この点もご容赦願いたい。

以上